

S O N R I S A

そんりさ

Vol.76



グアテマラ & ボリビア

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じて、ラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | |
|--------------------|---|-------|
| 1 ミルナ・マック裁判に有罪判決 | : | 新川志保子 |
| 6 グアテマラの人々と出会う旅報告 | : | 柏木智子 |
| 9 CONICと村の様子 | : | 青西靖夫 |
| 11 グアテマラ先住民の識字教育 | : | 石川智香子 |
| 14 ボリビア大統領選挙とその後 | : | 青西靖夫 |
| 15 からみ亭ミドリ映画帖(第9回) | : | 飯島みどり |

◆グアテマラ◆ ミルナ・マック裁判に 有罪判決

新川志保子

文化人類学者ミルナ・マック殺害事件で、殺害を計画し命令した容疑者に対する裁判が9月3日より始まり、1月におよぶ公判の後、10月3日に判決が下った。

ミルナ・マックは、内戦中軍による焦土作戦で避難民となりジャングルや山中に逃げ込んだ人たちの状況を調査したグアテマラ人の文化人類学者で、1990年9月勤務先であるグアテマラ社会科学研究所（AVANCOS）を出た直後を襲われ、27ヶ所以上刺されて殺された。その後妹のヘレン・マックが事件の真相を究明し、犯人の逮捕と裁判を求めて立ち上がった。事件の2年後には実行犯であるノエル・デ・ヘスス・ベテタ軍曹を計30年の懲役刑にすることができたが、この事件は軍による組織的な政治的暗殺であるとして、殺害を計画・命令した軍高官への裁判も要求していた。これが内戦

後も大きな権力を維持している軍の責任を追及する裁判であることと、グアテマラで司法制度がしかるべく機能していないことなどから、裁判はずっと延期されてきたが、事件から12年が経過した今年9月にやっと公判にこぎつけたものだ。

被告は軍の諜報活動の中核である大統領参謀本部（EMP）の当時の長であったアウグスト・ゴドイ・ガイトン將軍、EMPの中でG-2として知られる大統領保安局（DSP、元アルチーボ）の長であったフアン・バレンシア・オソリオ大佐、副長であったギジェルモ・オリバー・カレラ大佐の三人。

一ヶ月におよんだ公判では、内戦中の軍による反乱鎮圧戦略、安全保障ドクトリン、避難民の扱い、それとミルナ・マックの調査との関係、そして軍諜報活動と軍の指揮系統についてなどが、証言や提出された証拠をもとに検討された。

9月3日（火）公判が始まった。裁判の手順は、訴訟審査の後被告証言があり、その後双方の証人による証言と尋問、証拠書類の読み上げが行われ、そして判決となる。

▼被告の主張
証言によると、被告側の戦略は、①EMPの任務は大統領の護衛のみで軍とは独立した機関であること ②EMPは一切の諜

報活動をしていない ③避難民の問題とミルナ・マック、その調査については何も知らなかった ④よって事件とは無関係である、という主張をするということだった。

▼原告の主張
原告側は、この三人の被告の容疑を確定するために、①EMPは軍の一部であり ②諜報活動を行っていた ③軍の対ゲリラ戦略上、国内避難民、特に抵抗の共同体（CPR）の扱いは極めて重要で、微妙な問題であった。特に民政移管および和平プロセスでCPRの存在は明らかにしたくないテーマであった ④EMPはこの問題に関係していた ⑤ミルナ・マックの調査はまさにこの問題に関わっており、彼女の調査はEMPに知られていた ⑥ミルナ殺害の実行犯であるベテタはEMPの一部であるDSPに属しており、バレンシア・オソリオとオリバー・カレラの直接の指揮下にあった。⑦DSPおよび被告三人は諜報活動をしていた。⑧EMPの指揮系統では、トップのゴドイ・ガイトンの許可なくしてバレンシアとオリバーはベテタに殺害を命令できない ⑨よってこの三人がミルナ殺害の責任者となる、ということを確認しなければならなかった。

▼専門家証言

このために、原



告側は専門家としてエクトル・グラマホ將軍（セレン政府下で防衛長官だった。軍機構と安全保障ドクトリンについて説明）クララ・アレナス（AVANCISO所長・ミルナの調査の説明と殺害前の尾行などについて証言）エクトル・ロサダ（軍・政治評論家。民政移管前後の政治状況、軍と政府との関係、避難民問題などについて証言）ケイト・ドイル（米国防シヨナル・セキュリティ・アカイブ 情報公開された機密文書の分析。グアテマラ軍特にEMPの活動と内戦中の軍による人権侵害のかわりを証言）、ミルナ殺害時にその調査を行った公共省の役人（ミルナ殺害前の尾行やその方法、殺害の手口、殺害後の調査妨害などからこの事件が組織的な暗殺であることを証言）、軍機専門家（諜報機関の機能とその仕組みを説明）などを立てた。

▼一般証人
また、一般証人として、フリオ・カブレラ

司教（当時キチエ教区司教。ミルナにCPRの調査を依頼。ミルナから尾行されていると聞いた。CPRのコミユニケが新聞に掲載された二日後に彼女が殺されたことから、犯行は軍によるものであると確信していることを証言）、カルメン・ロサ・デレオン（当時政府による難民特別委員会CEARのディレクター。キチエ県で難民問題に対処するための予算をEMPが管理しており、パレンシアがその担当であったことを証言）ホルヘ・レムス（ベタタと一緒の刑務所にいた。ベタタにミルナ殺害について数回インタビューし、カセットテープとビデオに収めたベタタはインタビューの中で明確にミルナ殺害の命令を直接パレンシアから受けたこと、それがゴドイから認められていること、ミルナ殺害の前もパレンシアからの命令で少なくとも30件の暗殺を実行していること、彼はこれらの「仕事」をするために訓練を受けた、などを語っている。）ビルヒリオ・ロドリグス（カナダに亡命。マック家の向かいで新聞売りをしていた。ミルナの家が見張られ、ミルナが尾行されていたのを目撃している。3人の尾行者のうち指揮をとっていた一人がベタタであったことを証言）、ビニシオ・セレン（民政移管後初の大統領。政府と軍の関係などを証言）などをたてた。

●事件の背景

内戦・焦土作戦・避難民 グアテマラで36年間にわたる内戦の中で、反政府ゲリラ勢力を殲滅すべく、グアテマラ政府と軍が「焦土作戦」を展開した（70年代末から80年代初頭）。ゲリラの影響がある地域では一般住民もゲリラのシンパとみなして皆殺しにする戦術がとられ、大量虐殺が繰り広げられた。この弾圧を逃れて100万人にのぼる人たちがメキシコや米国などに避難、あるいは国内の避難民となった。この中でジャングルや山中に逃げ込んだ人たちが「抵抗の共同体」（CPR）を組織した（主にキチエ県）。軍はCPRをゲリラと見なし、空爆などを続けた。メキシコなどに逃れて国連の難民認定を受けた人たちと異なり、国際社会からその存在を知られることなくCPRの人びとは過酷な状況を生き延びなければならなかった。民政移管とCPR 内戦終結に向けての国際圧力などもあり、1986年に軍事政権からの民政移管が実現する。ビニシオ・セレンが大統領となる。このために軍は民間大統領を監視し、政府内での軍の影響力を維持するため、EMPをさらに強化した。

さらに物的証拠として、原告側は真相究明委員会報告書『グアテマラ・沈黙の記憶』とカトリック教会歴史の記憶の回復プロジェクト（レミ

「報告書『グアテマラ・二度と再び』、ミルナの研究報告、米国で情報公開された機密文書、グアテマラ軍の文書、ベタタのインタビュービデオとカセットテープなどを提出した。

▼被告側証人

ミルナ殺害の実行犯で30年の懲役で服役中のベタタが証言。今回の証言では、ミルナ殺害を拒否したほか、レムスのビデオ証言は、ヘレン・マックからお金とヘロイン1オンスを渡されて嘘の証言をするように頼まれたものだ、と述べた。だが、ビデオ撮影の年を97年（実際には94年）と答えるなど、証言内容にいくつかの食い違いがあった。被告側はその他、軍関係者を数人呼んだが、証言の内容はみな被告の主張をそのまま繰り返すものだった。

▼リアクション

裁判所の外には一見して雇われたと分かる一団が連日来ていたが、「判事は買収されている」「軍人にも人権を」「外国人が干渉している」などと書かれた横断幕をかかげていた。また、重要証人の証言と判決の日には軍関係者らが退去して押しかけ、一般傍聴者を小聲で罵ったりこづいたりしていた。

▼関係者の脅迫

公判が始まる数



避難している。判決直後にはミルナの娘でヘレン・マックと共に共同告訴人であるルクレシアさんが軍関係者に取り囲まれて脅迫を受けるという場面もあった。判決の後には弁護士など関係者数人が安全のためにすでに国外に出ている。

▼メデイアの関心

この裁判は、グアテマラ国内・国外で大きな注目を集めた。グアテマラでは新聞・テレビが連日公判の進行を報道していた。ブレレンサ・リブレ紙やエル・ペリオデイコ紙は、裁判だけでなくEMPの組織図や民政移管やCPR、和平プロセスについてなど歴史的な部分もかなり詳細な記事を掲載した。米国やカナダの主要新聞やラジ

オ番組などでも取り上げられた。

▼国際的な支援

米国弁護士人権委員会、ラテンアメリカ・スタディーズアソシエーション(LASA)、米国ナショナル・サイエンス・アカデミー(NSA)グローバル・エクステンションなどが裁判監視団を送った。また、連帯組織は弁護士や証人など関係者への同伴活動を行った。他、裁判が公正に行われるようグアテマラ当局へのレター送付運動、グアテマラの新聞への意見広告や裁判監視を広く呼びかけた。また、公判が始まってからは連日報告をウェブページやEメールなどで流した。

各国大使館の存在も目立った。米国外交館は連日人権オフィサーが傍聴に来るなど、この裁判に強い関心があることを明確にしていた。公判中に国務省の高官がグアテマラを訪問し、ヘレン・マック、AVANC SOと会談した他、副大統領と面会してマック裁判関係者の安全を確保するよう要請した。カナダ政府のコミットメントはさらに顕著で、カナダに亡命している重要証人ビルヒリオ・ロドリゲスが、今回の裁判でも証言するためにグアテマラに来たが（彼は現在カナダ国籍）ロドリゲスがカナダからやって来て、証言をし、またカナダに戻るまで、大使館員がずっと同行していた。また、これと

前後してカナダ外相がグアテマラを訪問するという徹底ぶりだった。判決の日には米国、カナダ、スエーデンの大使が傍聴に来了。

▼AVANCSO ミルナ・マックが所属していたこともあり、AVANCSOは組織をあげて裁判の後方支援を行った。公判中は連日傍聴に来てメモを取り、証言や尋問の内容、メディアでの取り上げ方などを

●グアテマラの裁判

判事は3人で全員一致しない場合は多数決で判決を決める。

刑事裁判の場合、原告は検察だが、共同告訴人 (querrelante adhesivo) という制度もあり、資格を満たしていれば検事でもなくとも告訴人になれる。マック裁判の場合は、殺されたミルナの妹ヘレンと娘のルクレシアが共同告訴人となった。検察からは二人まで検事が出廷でき、共同告訴人、被告もそれぞれ二人まで弁護士をたてる事ができる。今回のマック裁判の判事はモレリア・リオス (主席判事)、ジャスミン・バリ奥斯 (昨年のヘラルディ裁判の時に主席判事を務めた)、カルロス・チン。検察はマイノル・メルガル (元大司教人権オフィス) とタチアナ・モラレス。

分析して、マック基金にフィードバックした。

▼キチエ県

内戦の被害が最もひどかった県であり、このミルナ・マック裁判でもCPR関連などミルナとその仕事に関係のある人たちがたくさんいる。公判中も、キチエ県からずいぶんとたくさんの方が傍聴に来ていた。

▼10月3日 判決

判事三人の多数決により、被告のうちバレンシア・オソリオを有罪として懲役30年の刑が言い渡された。が、ゴドイ・ガイトンとオリバー・カレラは証拠不十分で無罪となった。判決はまた、真相究明委員会とレミーの報告書を認めた他、カブレラ司教やレムス、ケイト・ドイルらの証言とベタタのビデオテープなど、原告側が提出した証拠のほとんどを認めた。被告側の証人ベタタの証言は真実であると認められなかった。そして、ミルナ・マック殺害は軍による「組織的で政治的」暗殺であった、と結論づけた。

▼判決の評価

歴史的裁判 ヘレン・マックは、ミルナが殺されてからこの判決にいたる12年の苦しい闘いを思い起こして感無量の面持ちで「一人が有罪になったことは非常に

嬉しいが、残り二人が無罪放免なのは残念」と述べた。またミルナ殺害は軍による組織的で政治的な暗殺だ、と軍の責任に踏み込んだ判決の内容は高く評価した。また「これは姉一人だけではなく、軍の犠牲者となったすべてのグアテマラ人にとつての勝利だ」と述べた。だが、被告三人を全員有罪にできる十分な証拠があるとは確信していただけに、(アールゼンチンでは今回のマック裁判でそろえた証拠より少ない証拠で、軍責任者の有罪が確定している)二人が無罪となったことに対しては納得できない気持ち強い。マック基金と検察は現在、判決内容の詳細な分析をしており、無罪となった被告二人について上告するかどうかを検討中である。

今回の裁判では、軍組織の責任そのものが裁かれること自体がグアテマラ史上初めての事件だったが、内戦中の軍事戦略や諜報機関の活動と人権侵害などが裁判という公の場で明らかにされたということ自体が画期的だった。また、この裁判のもう一つの特徴は、実行犯ではなく計画・命令の責任者 *authoria intellectual* を裁くということだった。

免責・不処罰がはびこるグアテマラ社会だが、これはそれに風穴を開けた歴史的な判決だったと言えるだろう。

ミルナ・マック裁判意見広告 について

Licenciado Alfonso Portillo
Presidente Constitucional de
la República de Guatemala

Excmo. Sr. Dr. Licenciado Carlos Álvarez Lobos
Presidente de la Corte Suprema de Justicia
y del Organismo Judicial

Licenciado Carlos David de León Argueta
Fiscal General de la República

Guatemala, agosto de 2002

Section 1:

Ministerio, los datos (temperatura, circulación de diversos países del mundo) que todo sujeto que deseara ir a unidos para experimentar secciones del país que se tiene programado reducir, a partir del 13 de septiembre podrían tener un aumento de plantación y reducir el crecimiento de la agricultura, unido a la agricultura de la zona.

Hemos seguido, en relación, los estudios que desde hace diez años realiza la Institute of Health, Chicago, y aparecen en la lista por debajo una muestra de los que se estudia y nos hace a las necesidades del mundo de hoy.

Los dos años transcurridos desde que Blythe fue asesinada se han caracterizado por la inestabilidad y permanente incertidumbre que rodea este crimen de Estado. Ha sido año de desconfianza en la que familiares, amigos y compañeros de la víctima así como quienes colaboran con ellos y algunos operadores de justicia han sufrido arrestos, intimidación, intimidación y campañas sistemáticas a destruir su dignidad y su honra. Cabe recordar que varios hechos salieron al exterior y un investigador político fue asesinado.

A pesar de haber sido una persona justa, con un paralytismo para la política en Guatemala. Se legró establecer la responsabilidad material y moral y ya van a comenzar. Además, que luego proceda la revisión de la constitución de un nuevo parlamento por instituciones y apoyes del Estado las expresen las formas de la responsabilidad y la elección de poderes parados que formen la discreción de política.

Algunos que han sido sospechosos han lamentado haber sido condenados y los muchos delincuentes, todos menos que el juez, condenar los miembros de la asamblea municipal del crimen, podría revelar una gran historia. Creemos que el Estado de Guanajuato debe asumir sus responsabilidades y apoyar a la justicia contra la impunidad y contra las acciones de algunos a quienes, con un ejército y fuerza personal, brinden justicia a pesar de las debilidades del sistema.

Como narración de la realidad del mundo y personas comprometidas con la justicia y la vigencia de los esos altos valores de la humanidad, creemos nuestro relato más ver-

La fuga conjunta por el desierto de Mojave Alach.

Esperamos que el pueblo de Guatemala pueda volver a tener un gobierno autónomo, libre e independiente de las fuerzas militares, de otro tiempo, amparadas por la presión y el control de las tropas de una super-potencia, una potencia aliada a la actividad americana, un neo imperialismo, que el pueblo se desarrolle sobre la base de deliberaciones jurídicas que determinen, en el ámbito judicial, la responsabilidad de este crimen y la responsabilidad de quienes tomaron la decisión del genocidio.

En ese sentido, corresponde a los integrantes del Estado, en especial a los que ostentan cargos, hacer un aporte fundamental a la paz, a la legalidad, al respeto de los derechos humanos y a la vigencia del Estado de Derecho en Colombia.

No demandamos una ventura a la medida de nuestras capacidades. Solicitamos el respeto del Estado de Derecho a los justos en el que prevalece la certeza, la sana justicia, el Decretar y el cumplir con el deber para con los principios básicos de la humanidad.

Finalmente, con el primer aniversario de la independencia que han celebrado Helen Black, sus amigos y un representante de la Fundación Helen Black, que son a su vez amigos de ella, con los dos amigos mencionados viene a la casa del licenciado Roberto Romero el viernes 23 de agosto, solamente a unirse a todos los señores presentes a indispensable para garantizar la vida, la dignidad y la libertad de los y de quienes sufren en este proceso racializado.

Abstract

Agency International - USA
Comune Generale Roma Italia
Comite de Solidarite avec el pueblo de Centroamerica y Japon
Committee on Solidarity with the People of El Salvador
Committee von U.S.A. und Amerika Reichern

General Elections
 Guatemala Elections Action Project
 Guatemala Human Rights Commission/USA
 Guatemala News and Information Bureau
 Guatemala Scholars Network
 Human Dignity International Ignacia Arriola-Llanos Fund for Mental Health and Human Rights

Interamericano: Revistas Ceres
Luzeros: Comunicaciones de Human Rights
Mundo Interamericano: Foro de los Estados Americanos
Revista Interamericana: revista de la Unión de Naciones Americanas y
Revista Interamericana: revista de la Unión de Naciones Americanas y

Network in Subjunctivity with the People of Guatemala
 Migrating Networks
 Organization of Maya People in Exile
 Rites of Commemoration among Latinos and America Latina - RECON
 Road to Liberation

Robert F. Kennedy Jr. Memorial Center for Human Rights
Sunderland, von América Latina en Kyōto, Japan
Solidarity House, Sacramento, California
United Nations University Center for Africa Network
Washington Office for Latin America

意見広告要約

グアテマラ大統領、最高裁判所長官、検事総長

私たち世界の市民は、文化人類学者ミルナ・マック殺害の裁判について、以下のことを訴えます。

ミルナが12年前に殺害されてから、事件の真相と責任者の処罰を要求して闘ってきた彼女の遺族に私たちは連帯します。この事件はグアテマラ司法制度におけるパラダイムとなるケースです。実行犯はすでに有罪判決を受けており、さらにこの長い道のりで、殺害は国家のエージェントと組織によって計画されたことも明らかになっています。

長い間延期されてきた裁判が今回、数々の障害を乗り越えてやっと開始されようとしています。グアテマラ政府は、正義を求め、免責と不処罰の構造に対する闘いを支援する義務があります。国際社会の一員として、私たちはミルナ・マック殺害に正義が下されるよう求めます。また、グアテマラ国民が、3名の軍高官に対するこの裁判の行方を監視することができるよう、また、この裁判が法制度にのっとり、証拠に基いて十分な審理を尽くし、不偏で公正に進められるよう求めます。すでにヘレン・マックに対する脅迫はじめ、ロメロ弁護士 の自宅が銃撃されるなどの事件が起こっています。私たちは裁判関係者の安全が保障されるように要求します。

裁判が公正に行われるように米国やカナダ、日本のNGO26団体が共同でグアテマラの新聞プレス・リブレに一面の意見広告を出しました。日本からはレコムを含む四団体の賛同がありました。掲載日は、マック基金と相談のうえ、8月28日裁判の始まる一週間前でした。同じ日に米国のラテンアメリカ・スタディーズ・アソシエーション (LASA) もアカデミアとして、マック裁判を支持する意見広告を掲載し、二つの一面広告が並んで、大きなインパクトがあったと思います。

「グアテマラの人々と出会う旅」報告

柏木智子

この夏8月15日、24日の10日間「グアテマラの人々と出会う旅」に、鈴鹿昭弘さん、柏崎邦子さん、海野愛紗さん、古城三登さん、杉本唯史さんが行ってきました。

今回訪れた所は主に、首都にあるコミックとコナビグアの事務所、そしてコミニティ13つ。この2月に土地を手に入れたばかりのコミックのサンティアゴ・アグアティトランの農民組織、少し前に秘密基地発掘を行ったばかりのコナビグアのサキタカ村、そして輸出向け野菜栽培を行っているコミックのパキブ村です。各コミニティと共に、様々な課題、困難等を抱えています。サンティアゴ・ア

ティトランでは、去年11月に来日したティエゴ市長とも会い、お話を聞くことができました。訪日の際に学んだことを、村の政策運営に大いに役立てているようでした。

ここに、メンバーの皆さんの報告書がありますので、載せたいと思います。

★鈴鹿昭弘さん

結論から言うと、今回グアテマラに初めて行って、色んな意味で自分の「知らないさ」を思い知りました。3日目の移動中に石川さんにお聞きした時、最終日に専修大学の狐崎先生にお聞きした時、現状を理解するための情報源や能力が不足していることを痛感しました。スペイン語のできない僕には、誰かが取捨選択をして紹介してくれる情報をもらうのではなく、自分が必要としている情報を手に入れることがまだできないという、自身自身の現状に気が付いたのです。

初めて訪れたグアテマラ、そこで見たもの・聞いたもの・感じたものは、グアテマラの一つの部分に過ぎないでしょう。まだまだ知らないことがたくさんあります。日本においてはなかなか触れることの

できない情報も少し触れることができました。

グアテマラで先住民族も非先住民族の人も調和し、命を脅かされることのない生活が実現するのに、自分には何ができるのか。これを知り実行することが、僕の個人的な願いです。今回のグアテマラのスタディーツアーで自分に必要なことが見えてきました。ここで得た出会いを大切にしながら、グアテマラの勉強を続けていきたいです。

★柏崎邦子さん

「人々と出会う旅」には、退職後ずっと行きたかったのだが、今回ついに参加。現地では現地食を基本に、レストラン、大衆食堂、露店等で食べ、トイレは炎天下、ビニールシートをドア替わりにしたものもあつた。コナビグアのサキタカ村での、サンホセポアキル副市長の言葉が心に残る。「グアテマラは90%が貧しい。内戦の被害もあり、皆少しでも良くなるように奔走している。日本の援助はこのように貧しいところへも届くようにして欲しいと、伝えてほしい。」切実な願いだ。

グアテマラの新聞への意見広告掲載だけではなく、日本政府に黙っている時ではないと思った。

デコボコの急な山路を変える車窓からは、群生の山脈が見え、その美しさに先住民の厳しい生活を忘れそうになる。が、山頂近くまで耕作された山が目に飛び込むと、傾斜地での作物が雨に流される事はないのか、家から畑までの時間はどのくらいかかるのか、将来農機具(小型)は使えるのか、などと、考えさせられる。

現在も厳しい土地問題。子供の成長時には土地不足が発生するだろう。合意後は、支援組織が少なくなっているコニック、コナビグアへ、これからも変わりにくく援助することが大切であると感じた。今より少しでも良くなるように。今回、この貴重な旅に参加できました事、心から感謝致します。

★海野愛紗さん

今回、この旅に参加したのは、私がグアテマラに関して恐ろしく無知だったからです。大学で、ペルー・アングスの先住民の社会や生活について研究している

のですが、中南米の国々の実情は見たことがなかった為、参考になるだろう、と参加を希望しました。しかし私の頭の中では、グアテマラは「中米」ではなく「南米」にあり、ペルーにも近いのかな、といった状態でした。その誤りに気が付いたのは出発の一週間前。さらに、現地に行く先々では人々に驚かされました。参加・活動している人々の経済状況は苦しいものと聞きました。しかし、それでも活動を続けていく人々の姿をみて、目から鱗が落ちる思いを味わいました。伝統的な生活様式が経済的に苦しくても、ただ黙って耐えている、という私の失礼な思いこみは見事に打ち砕かれました。

私にとって、今回の旅は、単にグアテマラにおけるインディヘナの人々の生活に触れたりするだけでなく、どんな環境にあっても人間はその生活の向上を求めて努力するのだということ、一人一人の声は小さくとも、合わされば大きな流れに、力になるということ、その他生きていくという事について色々学んだように思います。この旅を今後の研究に十分に活かしたいと思っています。カルチャーショックが大きかった分、好奇心も、向学心も沸いてきました。本当に有意義な

旅だったと思っています。有意義なものにしなければ、とも思う今日この頃です。

★古城三登さん

6日間という短い間に、目一杯まわれるだけまわったという感のあるたびだった。組織の最上部で率いる人から各村で活動をする人々まで、たくさんの方の声を聞くことができ、貴重な体験をしたと思っている。これを今後はどうつなげていくのか。

「あなたたちにはこのグアテマラの状態を発信しなければならぬ。」いくつかの村で出たのは、このメッセージだった。つまり、彼らが実際に自分達で考え、行動して、状況を改善していく努力をし、一方で私達が情報を共有、発信していくことが求められている。それだけの責任を私達は持たされた実感した。

今回、実際にグアテマラの人々と出会って、文章で知るだけ(sense)の情報ではなく生の状況を知る(sincere)ことができて大きなインパクトを受けた。薪での調理や、雨水が生活用水であることがどこでも当たり前と感じ、首都のホテル

★杉本唯史さん

をすごいところだと思ったほどだ。また、少しの人が金持ちで多くが貧しいという言葉を実感した。各さをはつきり感じ、無力感も覚えたが、人が集まって自分達で考えてよくしていこうというエネルギーを間近でみて力をもらったような気にもなった。参加して本当によかったと思う。これからグアテマラの状況を伝えていく事以外にもできることがないか考えていきたいと思う。

まず衝撃を受けたのはトルティーヤ。

本場でも、メキシコで食べた物ともまた違う。地域によっても様々と聞いてさらに感動。大きさ、厚さ、色、味。当然だと言われてしまえばそれまでだけど、文化を理解することは多様性を認識することであり、それが「豊かさ」なのだろうと改めて感じた。

コミュニティでのミーティングやインタビューで貴重な体験だったのは、質問する時は、参加者↓石川さん↓スペイン語を話せる人↓そうではない人達、と伝えられ、回答はその逆をたどること。

スペイン語だけでインタビューを進めてしまうと、把握できず、発言できない人もでてくるという、短期間の訪問者として気をつけなければならないと思う。

最終日、現地で通訳・同行をしてくださった石川智子さんは「まだまだ見て欲しいところはあるけれど」と、短期間のツアーの難しさを指摘した。例えば、サキタカ村は地域の中でも特に活発に活動できているコミュニティで、1泊で訪問するには道路条件も相対的に良く、他支援組織が来た時もこの村が選ばれ、他のコミュニティから不満の声も出たという。

このようなスタディツアーの問題点を踏まえながら、それでも現場を訪れる意義を活かして、理解につなげていきたいと思う。

今回の旅で、彼らが自身の問題を世間に「語る・伝える」ことのできない状況を目の当たりにし、私達が現地で見たことや聞いたことは、彼らの「代弁」として伝えなければならぬ責任があることは感じました。しかし「伝える」という作業にも責任が伴うことも感じます。自分の見たことなんて、本当に一部でしょう。これから十分に学

び、見聞を広め、検証をしてそしてそれから責任のある行動ができるのだ、と思います。

私は今回初めて同行をさせていただいたのですが、手際が悪くメンバーの皆にも、運営委員や石川さんにもご心配・ご迷惑お掛けしたかと思ひます。私自身はこの旅で、色々なことを学ばせていただきました。このような機会を与えてくださって、本当に感謝しています。メンバーを含め今回出会った素晴らしい人々と、グアテマラと、これからも様々な形で繋がっていききたいなと思います。



グアテマラ

CONICと村の様子

青西靖夫

グアテマラで農民組織との活動をはじめ、もう8年ほどになります。内戦の弾圧で連れあいを奪われた女性たちを中心に組織されたコナビグアと同様に、自分たちの問題を自分たちで解決しようとして取り組んでいる姿にうたれ、そこから支援が始まりました。

グアテマラ先住民民族・農民全国調整委員会(CONIC・コニック)は、様々なコミュニティや農民グループの連合体ですが、そこでは大きな課題として「農民の手に土地を」ということを目指しています。

そのプロセスは様々で先祖伝来の土地の回復から、政府機関である土地基金を通じての購入、農園労働者の未払い賃金の代償としての土地払い下げなどです。

今回の七月の視察では、こうした土地獲得運動後のコミュニティの変化、その中でのコニックの役割、今後の支援のあり方などを検討するためのコミュニティの訪問を実施しました。

● トウクル地区

アルタベラバス県のトウクルでは五つのコミュニティを視察しました。この地域はもともと大農園が広がっていて、ここに住むケクチの人々は農園労働者として生活をしていました。しかしコニックに参加する中で、自分たちが法的に有する権利について知ることから、未払いの労働賃金に対する代償も求めるという形で運動が開始されました。そして多くの農園内のコミュニティが農園の一部を割譲される形で土地を手にしたのです。

どこのコミュニティでもこうして土地を手にすることで獲得した「自由」というものを高く評価していました。それまでは、農園主に言われるままに、身体の調子が悪かろうがなんだろうが、働かされていたのです。しかし自分で働きに行く時間も決められる、そういう「自由」を得たこと、これが最も大きな変化だと語ってくれます。

しかし、その先の展開については多くのコミュニティで問題を抱えています。

「コーヒー価格が暴落する一方で、生活費は高くなるばかりで以前と比べて生活がよくなったとは思えない」

山がちで、なおかつ道路も整備されていないトウクル地区ではコーヒーは大農園にとつても、小農民にとつても重要な現金収入源です。しかしその価格が下がって以来、それに依存していた多くの農民の生活が苦しくなっています。その一方

で新しい作物の導入は、まだまだ試験的な段階にとどまっています。

また未払い賃金の代償で土地を受け取った場合、農園労働者としての期間の短い、若い世代はほとんど土地を手にすることができませんでした。こうした若い世代を中心に新しい土地運動も既に起こっています。土地運動の第二世代とも言えるのでしょうか。やはり彼らも生きていくためには土地が必要なのです。その一方で、トウクル地区の多くの農園が半ば放棄されたような状況になっているため、そうした土地を政府の土地基金を通じて購入することを目指しています。

● コスタ

太平洋岸の低地には高地から土地基金を通じて大農園を購入して定着したコミュニティがいくつかあります。

土地運動以前は、ゴマの景気がよかつたこともあり、高地にくわすかし土地を持たない多くの農民が借地をしてトウモロコシとゴマを栽培していたのです。しかし借地料は高い上に、一年ごとの契約で家を構えるわけにもいかず、農園の一角での掘っ建て小屋暮らしをしていました。

そうした時期と比べると、土地を獲得したことで、自分の家を構え、自分の土地で働けるよう

になったこと、そして十分なトウモロコシも得ることができるといった点で生活は大きく改善されました。

しかし、ここ数年トウモロコシの価格もゴマの価格も低迷し、いくつかのコミュニティでは行き詰まり感を感じています。あるコミュニティでは、パパイヤを栽培している農家もありますが、二年目には市場が飽和して、以前は仲買商人が放っておいても買い付けにきたのに、もう誰も買ってもくれないといっています。

あるコミュニティでは米国への移民も増え、工作されていない土地も増えています。土地を手にしたものの、農業では生活を改善していけない、そうした矛盾に直面しているのです。

その一方で、牛を導入して成功しつつあるコミュニティがあります。自分の土地を草地にしたリ、川縁の共有地に放牧したりして、牛の頭数を増やしつづけています。牛はそれほど価格の変動が大きくない上に、あまり手間もかからず、お金が必要になつたらいつでも売れる、そんな利点があるようです。また村の中で子牛を売る家族もあれば、チーズや牛乳をつくって売る家族もあり。また牛糞は前ほど作らなくなつたトウモロコシ畑に入れられて有機肥料として利用されています。こうして牛を中心にくつつかの循環の輪が形成されつつある姿は、将来への可能性を感じさせます。

● コニックの役割

コニックでは様々な形で村を支援してきています。最も重要なのは土地獲得のプロセスでの法的な支援また組織的な支援などです。土地獲得後も様々な形でこうした支援を継続しています。

こうした組織強化は、村の改善、特にコミュニティレベルでのインフラの整備に大きな意味を持っています。黙っていて政府が整備してくれるような国ではないグアテマラでは、住民が様々な委員会を形成して、政府機関などに要請をあげていくことでインフラ整備が実現されていきます。こうしてよく組織されている村は、道路や電気、学校などを整備していくことができます。そうしたところとは反対に、土地獲得後もコミュニティの強化ができず、半数ぐらいの人が高地と行き来しているような村では、結局要請書を出すこともできず、何年も前から変わらぬまま、ということもあります。

またコニックでは九八年のミッチ台風以来、復興支援の窓口としてオックスファムなど欧米の大型NGOの援助を受けて生産プロジェクトも実施してきました。しかし、そうした支援はどうもあまり成果を上げてきていません。

プロジェクト自体が上から降ってきて、金額にあわせて手持ちの活動を組み合わせているだけのようなプロジェクトが行われてきたようです。

有機農業・土壌保全・女性グループでの共同での野菜栽培などなど、どうもニーズもはつきりせず、現状との整合性もなく、どうやって普及するのかもはつきりしないプロジェクトがいくつも行われてきたようです。

これには、ドナー側の問題もあるようです。プロジェクト案を短期間に提出させたり、ドナーの思いこみのプロジェクトを希望したりと。

● レコムとして

今回のコミュニティの視察は、コニックのメンバーと村を訪問し、意見交換をし、またその成果をもとに首都でのミーティングなども行い、コニックの活動に若干でも今回の結果を反映していくというものでした。話をしている中で、既に様々な問題意識を持って、改善しつつあることも見えてきました。レコムとしても報告書も提出し、今後の改善を待っているという感じでした。

またレコムでは九八年に普及チームとの活動をいったん終了し、二〇〇一年から活動の方向を再検討した上で、イサバル県での活動を行ってきていますが、そこでもあまり急ぐことなく、コミュニティの組織強化を図りつつ、村人とともに村の改善案を作り、その後で具体的な活動をしていくという方向で実施しています。この活動の成果がうまく反映していければとも思っています。

民間小規模支援で実現された

グアテマラ先住民の識字教育

小さなハートのプロジェクトを通して

考えさせられたこと

石川 智香子(元青年海外協力隊員)

「クブルコ市の先住民のためにバイリンガル識字教育の教材を印刷したいのだが、資金がない」という声がグアテマラ・バハベラパス県の青年海外協力隊員であった私に寄せられたのは、2001年の春のことだった。クブルコ市は、県内でもラビナル市、サンミゲル・チカフ市、とならんでアチ系先住民の人口比が高く、非識字率は68.9%にのぼる(二〇〇〇年、CONALFA)。

正直言って、はじめはそこに高いニーズがあるのか、疑問だった。グアテマラでは、先住民言語と公用語のスペイン語の両方を学ぶバイリンガル識字教育が実施されている。しかし、中等教育を受

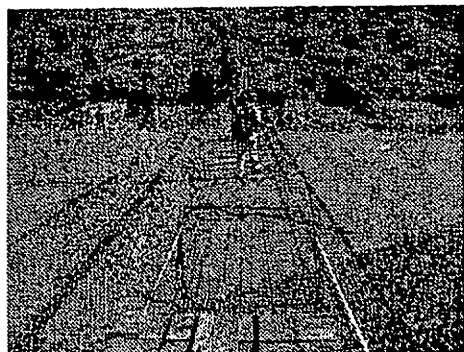
けた都市部の先住民を中心とする言語への意識の高まりや、バイリンガルの先住民の社会開発・教育事業での雇用拡大(先住民言語の「食える言語」化)が見られる一方で、当県の貧しい人々の間で

は、内戦や乾季の季節労働による移動・商業等を通じ比較的スペイン語が浸透したこともあって、「食ってゆくための言語」(スペイン語)の学習に集中したい、と、バイリンガル識字教育が拒まれる現象も見られた。アルファベットを用いたマヤ言語の表記法がやや複雑で、教え手となる人材が都市以外で確保しにくいこともあり、僻地に住むスペイン語が苦手な貧しい先住民にはなかなか教育機会が届きにくい、という皮肉な現実もあった。更に第一、バイリンガル識字教育用には、国立識字教育委員会(以下CONALFA)が編集したアチ語用教材が既に存在していた。

*

*

ともあれ、まず話を聞きに行ってみた。教材の印刷費用を必要としていたのは、リフォルマード教会(紙幅の都合で、この教会の地域における位置づけの確認過程については割愛する)の下にあるNGOだ。当教会は慈善活動の一環として15年間にわたり、クブルコ市で最も貧しい山間のエンバルセ地域で、先住民居住集落の生活向上活動を地道に続けてきた。その結果、地域の人々の母語の尊重と教育を重視するようになり、市の主な教会と協力しあって、聖書や賛美歌をアチ語に翻訳し始める。これがこのNGOの出发点であり、やがて市の先住民が貧困を克服するための識字教育、子供との意思疎通に不自由する小学校教員を対象とするクブルコ・アチ語教室等、宗教上の目的を超えた活動を開始した。その重要な活動のひとつが、バイリンガル識字教育用のクブルコ・アチ語教本の作成である。彼らはクブルコ・アチ語が、ラビナル・サンミゲル・チカフで話されるアチ語との間に、円滑なコミュニケーションや学習、自文化への愛着を阻むほどの差異を呈すと言う。だからマヤ言語学院(A



LMG)等がアチ語の「標準」とするラビナル・アチ語ではなく、地元の言語にこだわるのだ。さて原稿が完成しCONALFAから内容の承認も受けたものの、教本を印刷する費用がないという困難に直面してあちこち伝をあたるうちに、私のところに話が来たわけである。

経験的には、地元の人々にとって、これは意義のあるプロジェクトだった。まず日々の労働があり、また地元の言語を中心に生活しているクブルコの僻地の先住民の成人にとって、バイリンガル教育は単なる読み書きのみならず、新たにスペイン語を学ぶ機会でもある。そこで指針となる「母語」が、愛着があり日常使

われているのと違う「アチ語」であれば、自信も持てず学習に支障をきたしてしまふ。当市ではかつてラビナル・

アチ語の教材で識字教育を行い、多くの参加者が学習の困難から識字教室を中退してしまった。その経験から識字最重点地域であるにも関わらず、当市ではバイリンガル識字教育が実施されなくなっていた。そのためバハベラパス県CONALFAも今回作成されたクブルコ・アチ語教材の使用に積極的だった。第2にこの教会には、通常の開発プロジェクトが寄り付かず、教員も定着せずにしばしば小学校が休校状態となるようなエンバルセ地域で、非信者を含めた小規模生活向上プロジェクトを行ってきた実績があった。彼らは識字教育事業に意欲的で、最低月に1度は各地のモニタリングを行うシステムと僻地で識字教室の教え手になりうる人材を用意していた。

しかしながら、クブルコ・アチ語は当市を中心とする限られた地域でしか流通しない言語なのも事実だ。それはラビナル・アチ語も同様だという論も成り立つが、政治経済的發展ではクブルコに先んじたラビナルの勢力により、いわゆる先住民運動や教育面で表に立つアチ系先住民の多くは、ラビナル出身であった。ク

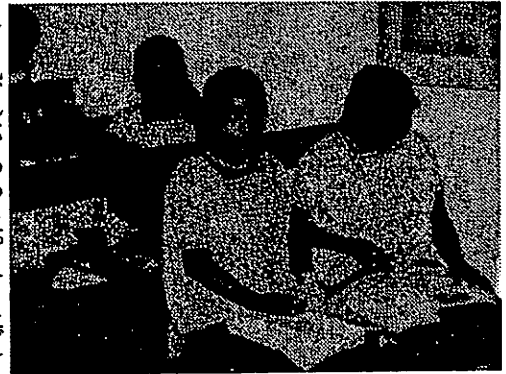
ブルコ市の先住民集落の小学校に職を得るのも、ラビナル出身の「バイリンガル」教員であり、現在のところ「バイリンガル」の認定制度もラビナル・アチ語が基準とされている。また先住民運動の拡大にとって、あるいは人口規模上主要な先住民言語集団でないために政府や国際機関の関心を引きにくいアチ系先住民の利害関心にとって、クブルコのラビナルからの異化は何を意味するのか、という点については、外国人には関わり方が難しい問題である。

* *

これらの事情を検討していた頃、「小さなハート・プロジェクト」という制度を知った。これは青年海外協力隊の隊員が、配属先での業務とは別に、現地にニーズのある小規模プロジェクトに対して、日本からの民間支援の橋渡しを担う制度である。隊員を通じて案件が申請されると、それに関心をもった団体や個人が支援を申し出る、という流れになっている。標準化か否か、といった大掛かりな言語政策に触れず、現状では教育機会に利することの最も難しい人々に支援を

届けるには、このような小規模の民間支援がふさわしいと考え、申請への協力を決めた。

案件の作成を協議する際には、日本の支援者のまだ決まっていなかったため、私自身の考えに加え、「日本人支援者の価値観」の最小公約数の部分を想像しようとする努力ながら、意見を述べた。例えば、NGOは「小学校教員への研修や、商売等で地元の先住民の顧客ニーズに副えるようアチ語を学びたいラティノの人々の教材としても印刷したい」と希望したが、私は、「他言語への適応力もある若い将来の世代の教育や、地域言語としてのクブルコ・アチ語の普及までは推進できない」とした。そして、この教材なくしてはいかなる教育へのアクセスも困難となる僻地先住民集落の成人識字教育に対象に、協力範囲を絞った。もし予めドナーが決まっていれば、ドナーと現地の意図のすり合わせが可能かとも思うのだが、今回は広く相手を探して、お互いの経緯を詳しく知り合う間もない「お見合い」方式だ。民間支援では、「支援しよう」という誰かの思いが、明らかに存在



するわけで、「お見合い」方式では申請書の絞込みが甘いと、支援者の意図と実段階でずれが生

じる恐れがあった。そこでNGOと私は申請案をめぐり議論を重ねたが、今思えばこれはプロジェクトの正当性について説明したり、諸々の変更を迫られたりした時の対応の基礎づくりに役立った。

* *

申請の結果、日本ヘレン・ケラー財団から支援を頂き、350人分の識字教材の印刷が完了された。2002年4月に識字教室が開始され、教育の機会が与えられてこなかった集落では今でも聴講者が増加し続け、教師の都合で休講が続くと何時間もかけて市の中心まで学習者達が陳情にやってくるほどの熱心さだとい

う。

支援を頂いた、日本ヘレン・ケラー財団は戦後ヘレン・ケラー女史の訪日を機に盲聾・肢体不自由者など心身障害者の社会的福祉増進と心身障害の防止を目的とする事業を行うために設立された社会福祉法人である。設立50周年を記念する際、どうせなら何か社会的貢献が残るような事業を、と当財団と職員有志の方々が資金を出し合い、途上国の4つの小規模教育プロジェクトを支援した。その1つが今回の識字教材の印刷だった。「小さなハートのプロジェクトでは、隊員の方が地域に実際にいらして、地域の細やかなニーズに対応した案件をあげる。そこに私達の仕事と何か、こう共通するものを感じたんですよ。」当財団盲人救護施設平和寮長 山本卓氏からそんな言葉を聞いたのは、協力隊の任期を終了し、帰国してからのことだった。このような気持ちにたった民間の支援が、国の規模では対応しにくい、地域の社会的弱者に届くよう、微力ながらお手伝いした経験は、とても勉強になると同時に大きな喜びだった。

ボリヴィア大統領選挙とその後

六月三〇日に行われたボリヴィア大統領選挙で人々を驚かせたのは、得票率一位のMNR(革命的国民運動)にわずかに一・五%という僅差、二〇・九%という得票率でMAS(Movimiento al Socialismo 社会主義運動)という先住民系左派政党が第二党となったことであろう。

MASを率いるのは前下院議員で、コチャバンバ県のコカ生産地域の農民を代表するリーダーでもあるエヴォ・モラーレスである。

またボリヴィアのCSUTCB(農民労働者統一組合連合)を率いるアイマラ系のフェリペ・キスベを大統領候補に掲げたMIP(パチャクティ先住民運動)も六%の得票率で、五位に位置した。

★ Bolivia 大統領選挙 ★

エヴォ・モラーレスもフェリペ・キスベも、それぞれの基盤組織だけに支えられたわけではなく、学生など左派系の支持者や先住民の票を集めたと思われ、ラパス県ではMASは二二・四パーセント、MIPは一七・七の得票率、コチャバンバ県ではMASの得票率は三七・六%にも達している。(数字に関しては PULSO 163 号九ページの記事を参照)

しかし選挙後の連立を巡つてのうごきの中でMASは早々と野党としての立場を表明し、八月四日に行われた議会での決選投票の結果、左

派のMIR(革命的左翼運動)と連合したMNR(革命的国民運動)のサンチェス・ロサーダが再び大統領として選出された。(一期目は一九九三年から九七年)

大統領就任後の動き

ロサーダ政権は就任後、積極的に様々な組織との接触を続け、行き詰まりとなつている問題解決の糸口を探している。

その一つがコカ問題である。ボリヴィアでは八九年から不法コカ栽培を根絶するための政策を実施してきた。しかしコカの栽培が続く一方でコカ農民との衝突は絶えない。今年の一月にもサカバのコカ市場の閉鎖を巡つて警察・農民側に七名の死者を出し、その責任を巡つてエヴォは議員を罷免されるという事件も起きていた。

こうした中、ロサーダ政権は九月一三日に、はじめて大統領として直接にコカ農民との交渉に乗り出したのである。交渉は一〇月の第一週の時点ではまだ続いており、ボリヴィアのコカの流通に関する調査、コカ栽培地域の非軍事化、代替開発の問題などが議論されているが、コカの根絶に関してどのような方向性が打ち出されるのかは定かではない。

ボリヴィアにおけるコカ根絶政策などについては <http://www.wola.org/> The Drug War Monitor

"Coca and Conflict in the Chapare."

などが参考になる。

一方のフェリペ・キスベは、「CSUTCBにいる方が、議会で座つて議論を聞いたり、委員会にでているよりよっぽどいい。自分は金を稼ぐために選ばれたんじゃない」と、議員生活にうんざりした発言などもしているが、九月二十九日はり政府側との交渉を始めた。

フェリペ・キスベは農民組織の代表として、農牧大臣他を、ラパスから一〇〇キロほどの電気も水もないアマウアヤという村に迎え入れ、チュニーヨヤリヤマ肉など地元料理で歓待?した。この姿は是非で次のアドレスで見てもらいたい。
<http://ca.gnpsa.net/2002/09-September/20020928/>

この会議の中で、農民組織側は先住民のための社会保障、先住民のための大学の設置、農村のインフラ整備、農村教員の待遇改善などに加え、自由貿易協定の拒否など提案。以上のようなテーマは持ち帰られ、一〇月末をめどに検討された上で、大統領との直接の会談が設定されるものと思われる。

これ以外にも東部低地での大農民から小農民も含めた銀行債務の繰り延べ問題など、解決を迫られている課題が山積している。

任期当初から、反発した農民組織などからの道路封鎖を受けることになれば、政権基盤すら揺らぎかねない。一〇月はロサーダ政権にとっては最初の正念場であろう。(青西靖夫)

エルサル

からみ亭ミドリ映画帖

第九回

問いの立て方を間違うと求める答は永久に得られない。ラテンアメリカ映画はかつて存在し、今後も存在し続けるかと自答すれば、もちろん是と自問したいところだが、そもそも「ラテンアメリカ」「映画」とはいかに定義されるのか？ 問いの立て方を間違っていないかと不安に駆られる。それに比べれば、純然たる国家名を冠して「エル・サルバドル映画は存在するか」と問う方がいくぶん気は楽である（答はたちどころに出そうだし）。とはいえこの国で、在米・在豪同胞推定二百万のさまざまな働きに多くを期待する傾向は官民挙げて強まるばかり（米・国独立記念日を「エルサル移民の日」として祝う感覚！）。一方、紙切れに書きつけられた文字がすべて詩や小説に転化するわけではないように、録画技術が容易になつたおかげで大量に排出されるビデオ画像を直ちに映画（映画芸術！）とみなすわけにもゆかない。

そう、いまエルサル映画ないしエルサル映画人の可能性が取り沙汰されるのは、監督・製作者が米国にその（少なくとも仕事の）拠点を置く例がほとんど。撮影手段のみならず上映形態もビデオに限られる。この七月、地元紙に三日続けてインタビュウの掲載された監督パウラ・エレディアの場合、優れたテレビ番組に与えられる米国エミー賞の候補となつたことが破格の扱いを許したようだ。ただし候補作は九月十一日のニューヨークをめぐるドキュメンタリー。同市在住映画人がジュリアーニ市長の全面支援を受けて作れば、否応なく賞のひとつくらい自然に寄つても来よう。その辺を意識してか、当人は「問題はともかく資金。お金さえあればここで9・11追悼作品の話なんかしてないわ。自前の企画について話しているわよ」と素っ気ない。その「自前の企画」とは、ホンジュラスの女性詩人クレメンティナ・スアレス（一九〇二・一九二）の生涯を通して二十世紀中米史を語る試みという。なおこれまで彼女の手がけた作品が本国で公開された気配はない。さてその七月四日、首都のライブ喫茶にて「移民の日」記念作品二本が公開された。やはりNY在住の若手クラウディア・アマヤによる「夜明けの沈黙」(El silencio del amanecer 二〇〇二年)、および今年一月、一九三二年農民蜂起*1の指導者フエリシア・アマに關する記録を完成させたダニエル・フロレスの前作「ホームランド」(Homeland 二〇〇〇年)、報道に従えばいずれ

も米国製。米国移住組の若者たちを追う。ことに前者は監督自身の記憶を軸に内戦、渡米、十数年ぶりの帰還過程を映し出す。こうした、言わば「亡命第二世代」が「祖国」と出会う―それは再会というより初めての出会いに近い―作品は近年「ラテンアメリカ映画」界に続々登場しつつある。前回紹介した「マルティン……」もその一本に数えることができるし、チリやウルグアイを出自とする若手が「帰還」に取り組むのは理の当然であろう。

たとえば昨年メキシコシティの小さな映画祭に参加した「うなじを狙え」(En el ombligo, rodó)ゴブラ 墨 二〇〇〇年)は、今や人気絶頂のガエル君が亡命先メキシコで育つたウルグアイ人青年に扮し、軍に殺された父の仇を討つべく初めて南へ帰還、国法の不備を突き決闘に訴えるという筋立て。短編ながら強烈な印象を残す。監督は六八年モンテビデオ生まれというからクーデタ時には五歳か。ベッドの下に隠れた少年の、床を這う視線が父親の倒れ込む姿をとらえる。

脱線ついでに風呂敷を広げよう。昨今日本でも人気が上昇中の若手男優池内博之君は母親がサルバドル人だそうである。既にアジアと米国でそれなりの放浪歴を積んだ若者が、「次に行きたい国は」と問われて「メキシコ、というかエル・サルバドル」と答えている（某雑誌インタビュウ）。母の故郷なのだが自分には内戦と貧困のイメージし

かない。幼い頃の記憶も薄れ、いつたいどんな街にどんな人々が生きているのか見当がつかず、改めてこの目で見てみたい、というのである。彼は七十六年生まれ、父親は柔道家とあるから協力隊ベビ―であることは間違いない。

六〇年代末、日本政府が(悪名高き)米國平和部隊を真似て青年協力隊を發足させたとき、ラテンアメリカで最初の派遣先となる榮譽に浴したのは「親日國」「中米の日本」ともてはやされるエルサルバドルだつた。單にラテンアメリカ向けというに留まらず、協力隊史上この國は先陣を切つたのである。当時エルサルへは美術・体育分野の隊員派遣が中心(そのひとりが若き安藤二葉氏*)。しかし七〇年代半ば現地情勢は急速に悪化、七八年のインシンカ社邦人社長誘拐事件を機にいわゆる在留邦人はほとんど撤退、大使館は閉鎖された(九二年の和平協定発効後ようやく再開)。翌七九年には全面内戦へと突入する。つまりひとつ間違えば、かの池内青年も内戦中に命を失つた何千何万の子供たちのひとりとなすか、あるいは孤児、あるいはひよつとするとゲリラに身を投じていたかもしれないのである(十二、三歳で「山」に入つた者は決して少なくない)。

池内君、スペイン語は「話せないけど言われていることは大体わかります」と同じ雑誌に語っている。ならば、誰か心ある出資者はいないものか? 日本・エルサル合作映画「池内君故郷へ帰

る」! 帰還新としては五番煎じくらいだが、日本外交・國際協力政策を批判的に検証する上では有意義ではなからうか。七八年当時と同様、日本社会の一般常識にはエルサルバドルの工の字も見当たらない今日、二十代の売れっ子が主役を務めてくれればエルサルの知名度も少しは上がるだろう。

現日本大使は植民地時代の目玉商品だつた染料アニルの復興に力を入れているらしい。それはそれで結構なのだが、和平後滿十年を経て、そろそろ大使館閉鎖にまで至つた過去を外務省に「総括」「自己批判」してもらふことも必要なのは、フジモリ・ムネオ・藩陽とつながる體質は決して昨日今日の産物ではない。つい最近も、当地で意氣投合したアルゼンチン人記者(彼女も亡命経験者)から「大使にインタビューしたけど、日本大使館つて人権關係の予算全然ないのねえ」と呆れられた。彼女は、ないのは予算だけとは受け取らなかつたようだ。筆者はここで何人も人権関連予算を増やせと主張するつもりはない。ただ、ラテンアメリカの人々が日本國家・政府・社会に対して抱く妙な幻想ないし期待はもう破られてよい時期である。

再び、エルサル映画は可能か。ある論者によれば、一九三〇年代、トーキー技術の到来とともに、ニュースフィルム中心だが年間十五本の國產映画が作られ、その後も(皮肉なこと)軍政は映画製作に好意的だつた。七二・八五年の間には

長短とりまぜ四百本近くが製作されたとの指摘もある。そしてもちろん内戦期、ラジオ・ペンセレモス關係者*3の手により映画はゲリラ側の重要な広報宣伝手段たる任を付与され、何本かは日本へも届けられた。こうして振り返ると、少なくともこの小さな國の場合、國產映画は國家もしくは國家に對抗する存在が自らを正当化し宣伝する必要があるとき可能になつてきたように見える。ポスト内戦のいま、誰が誰に向かつて、この國家の何を正当化し宣伝する必要があるか。良くも悪くもプロバガンダの使命を越えて映画が存在しようとするとき、この小さな國は小國の不遇をまたも噛みしめることとなる。

*1 一九三二年蜂起および後段のインシンカ事件については『禁じられた歴史の証言——中米に映る世界の影』(現代企画室)を参照されたい。

*2 『燕たちの調書』(集英社)参照。
*3 ラジオ・ペンセレモス關係者のその後の動向については稿を改めて報告したい。

(八月三十日記 飯島 みどり)

お詫びと訂正

連載第七回本文中、興業とあるのは興行の誤りです。

中南米ニュースクリップ 2002年10月

◆コナビグアの活動家が殺される！

9月6日にキチエ島のJoyabajでマヌエル・ガルシアさんが殺されました。彼は、これまでコナビグア等の秘密基地発掘活動に積極的に参加してきました。目がえぐり取られ、舌や耳、鼻が切り取られ、頭を切り落とされるというむごい殺され方です。秘密基地発掘という過去の人権侵害の真相の究明につながることに関わるとこういう目にあうというメッセージとの推測もできます。

更なる詳しい情報等が入手された場合は次号以降に掲載いたします。

◆ブラジルで左派大統領誕生か

ブラジルで10月6日に大統領選挙が行われた。左派で野党労働党（PT）のルイス・イナシオ・ルラ・ダシルバ（56）が、46.44% 3900万票を獲得した。二位のジョゼ・セーハ（23.20%）にかなりの差をつけている。が、1回目の投票で当選に必要な過半数がとれなかったために、今月27日に決選投票が行われる。ルラ・ダシルバが当選すれば、労働党が初めて政権をとることになる。

ルラと労働党は昨年経済プランを作ったが、これは経済界の主要企業からも支持を受けている。副大統領候補であるジョゼ・アレンカルは自由党で繊維企業の重役を務めているというのも、中道寄りで穏健化した姿勢を強調するのに役立っている。

今年6月IMFからの30億ドルの借款については、債務不履行は行わないと明言しているが、同時に現在の経済政策を続けるならば債務不履行に陥るだろうとも語っている。またルラ・ダシルバはラテンアメリカ自由貿易協定には反対の立場を取っている。

(World Press Review 2002年10月7日 より)

◆グアテマラ ヘラルディ判決が覆される

ファン・ヘラルディ司教殺害（1998年4月）で有罪となった被告軍人3人が控訴していた件で、本日10月8日グアテマラ上訴裁判所は昨年6月の有罪判決を無効とする判決が下された。

カトリック教会歴史的記憶の回復プロジェクト（レミー）を指揮して内戦中の人権侵害の真相究明を行ったヘラルディ司教は、1998年4月28日、レミー報告書『グアテマラ・二度と再び』が発表された二日後に惨殺された。これに対して3人の軍人（パイロン・リマ・オリバ大佐、パイロン・リマ・エストラダ大佐、ホセ・オブドゥリオ・ビジャヌエバ）が殺害を計画・実行、そして司教を補佐していた司祭（マリオ・オランテス）と賄い婦1人がそれに協力したとして裁判になったが、昨年6月に軍人3人に対して懲役30年、司祭に対して懲役20年の判決が下りた。

これを不服として軍人3人が控訴していたが、今回はそれに対する判決が出たもの。一審判決が覆されたことによって、裁判は再度振り出しに戻ることになる。

(グアテマラ大司教人権オフィスのコミュニケより 2002年10月8日)

◆ハリケーン・イシドアとハリケーン・リリ、カリブ・メキシコ・米国南部に大被害

立て続けにきた二つのハリケーン、イシドアとリリによって、キューバ西側とメキシコのユカタン半島に大きな被害が出た。

イシドアはカテゴリー3で、リリは中心風速90キロメートルという、めったにないカテゴリー4に認定された。キューバでは8000の家屋が倒壊した。海岸部の小さな漁村は村ごと吹き飛ばされてしまったという。被害がひどかったのはビナル・デル・リオ一帯で、タバコの収穫に大きな被害が出た。メキシコ政府はユカタン半島の45のコミュニティで緊急事態宣言を行った。キューバとメキシコ両方で60万人にのぼる人たちが避難した。国際赤十字が緊急支援を呼びかけている。

米国ではテキサスからルイジアナにかけて50万人に避難勧告が出され、このハリケーンによる被害は1億ドルと言われている。

(Catholic Relief Services 2002/10/03, TERRA Noticias 2002/10/03より)

いんふおるましおん インフォルマシオン Informacion

●中南米の映画みてお茶する・会 第1回 日時：11月16日(土) 1200~1500 「いつでも夢を」 ~Lo que le pasó a

Santiago~

場所：国際協力プラザ 地下鉄日比谷線「広尾」駅 出口1 東京都港区南麻布5-2-32 第32 興和ビル1F TEL:03-5423-0561

参加費：無料 以後 2003 年4月まで第3土曜日 映画の詳細等はHP 参照。 日本ラテンアメリカ協カネットワーク

<http://www.icaapc.org/recom/>

●『写真展 マヤの人々』 (写真家 古谷桂信 写真展)

■10月31日(木)~11月6日(火) 午前10時~午後6時 (日曜・祭日は休み) アサコムホール(朝日新聞大阪本社一階)

大阪市北区中之島3-2-4 tel 06-6201-8034 fax 06-6231-2124 《11月2日(土) 午後4時 古谷桂信によるスライドトーク》

■11月9, 10日(東京女子大学の学園祭) 午前10時~午後5時 東京女子大学 6号館 6201, 6202教室 東京都杉並区善福寺 2-6-1

■11月16日(土)~24日(日) 午前10時~午後6時 はんしん自立の家(重度身体障害者寮有施設)1階ピロティ 兵庫県宝塚市美幸 町11-16 tel 0797-73-7213 《11月23日(土) 午後2時 古谷桂信の講演会》

■11月26日(火)~30日(土) 午前9時~午後10時(営業時間内) 喫茶・居酒屋「風まかせ、人まかせ」 大阪市天王寺区玉造本町 12-1 tel/fax 06-6768-1340

●『写真展 湖ととともに生きる』 グアテマラのマヤ共同体、サンティアゴ・アティトランからの報告一

■12月1日(日)~12月8日(日) 午前9時~午後9時(最終日は午後5時まで) ラスタホール(伊丹市生涯学習センター) *火曜日 休館 兵庫県伊丹市南野2-3-25 tel 072-781-8877 《12月8日(日) 午後3時 古谷桂信による写真解説》

◆RECOMでは、グアテマラで12月中旬に 琵琶湖とアティトラン湖、それぞれの過去と現在の比較写真等の写真展を行います。また、湖の水資源・自然資源の持続的管理に関連したシンポジウム(グアテマラシティ)や、サンティアゴ・アティトランでのセミナーも開催します。

●ニカラグアに行きませんか? 新川志保子さんと行くニカラグア大西洋岸・人々と出会う旅13日間(2003年1月1日~13日暫定)

そんりさのグアテマラ・ニカラグアの記事でおなじみの新川さんと行くニカラグア・人々と出会う旅です。費用 約27万円ぐらい

ニカラグア大西洋岸自治地域を訪問します。詳細は11月初旬に確定予定です。ご関心ある方はRECOM宛にお問い合わせください。

★コスタリカ・キネマ・カフェ 11月4日(月) 13時~ 京都教育文化センター 京大病院南門前 京阪丸太町駅すぐ

<http://www2.odn.ne.jp/kyobun/>

第1部 <上映会>13:30~ 『軍隊をすてた国』(あいファクトリー) 第2部 <講演会>15:10~ 早乙女愛(『軍隊をすてた国』プロデューサー) 足立力也(同アシスタントプロデューサー、通訳) 水島朝穂(早稲田大学教授、綴法学) カレン・オルセン(元大統領夫人・コスタリカの母)

第3部 <交流会>17:30~ 第1部・第2部 前売券1000円 当日券1200円 前売券はホームページにて。

コスタリカ・キネマ・カフェ実行委員会 075-213-8554 (藤井) costako@hotmail.com <http://www3.to.dreamer.jp>

★学習会 「ペルーとフジモリ、そして日本 ~フジモリ政権下の人権侵害を考える~」 10月28日(月) 19:00~21:00

会場：千代田区中小企業センター 501会議室 (東京都千代田区神田錦町3-21 竹橋駅下車徒歩5分) 案内図: <http://www.chiyoda-business.or.jp/home.html>

参加費:500円(資料代) 講師: 須田 佐世(ささ) 弁護士。アムネスティ日本を軸に国際人権活動に携わる。フジモリ氏起訴検討会コーディネーター。

主催アムネスティ・インターナショナル日本/国際人権法チーム(申し込み・問い合わせ先)アムネスティ・インターナショナル日本 東京事務所 国際人権法チーム

TEL 03-3518-6777 FAX 03-3518-6778 Email intlaw@amnesty.or.jp (11月16日にも同様のイベントを予定しています。お問い合わせください)

★講演会 「軍隊をすてたコスタリカ 元大統領夫人カレンさんと話そう」 11月3日(日) 午後1時30分~日本教育会館(千代田区一ツ橋・神保町駅徒歩2分)

カレン・オルセン・デ・フィゲレスさん(コスタリカ大統領:ホセ・フィゲレス氏(故人)のお連れ合い) 会費:大人・前売1500円、当日2000円 中高生1000円 カレンさん招へい実行委員会(諏訪の森法律事務所寄付 TEL:03-5287-3750 FAX:03-5287-3780) 電話での問い合わせは午後1時~5時

★講演会 「グアテマラ最新調査報告と世界の先住民族の今後 自決権とエンパワメントに向けて」 11月20日(水) 午後6時半~9時

ロドルフォ・スターベンハーゲン氏(ボリビア大学大学院教授・国連人権委員会先住民族の人権特別報告者) 場所:財団法人松本治一郎記念館3階会議室(南北線「六本木一丁目」出口1より徒歩5分/営団地下鉄日比谷線・大江戸線「六本木」出口5または3より徒歩7分) 駅からの道順は、

<http://www.imadr.org/japan/tokyo.office.html> を参照 参加費: 800円(IAMADR会員・ボランティアは500円) 連絡先: 反差別国際運動国際事務局

(IAMADR-IS)(担当:森原、中村) Tel:03-3586-7447 Fax:03-3586-7462 Email: imadris@imadr.org (10月26日はグアテマラ報告会を予定。)

この「いんふおるましおん」欄への情報提供をお待ちしております。発行日の1週間前までにお知らせください。

★事務所の開所日が増えました!!! これで事務所に立ち寄るのが便利になるね!

これまで毎週木曜日の午後7時~午後9時には、定例会で事務所が開所しておりましたが、新たに 金曜日 と 土曜日 も開所することとなりました。ぜひ、東京事務所へお越しください。金曜日 午後3時~9時 土曜日 午後1時~6時(尚、金曜日と土曜日に関しては、所用にて不在となる場合がございますので事前にお問い合わせくださいませ。)

★レコム図書館・ラテンアメリカ関連の書籍・ビデオがいっぱい 会員・賛助会員は館外貸出し利用可能。(遠隔地への発送可・手数料要(送料+300円))

入ってる? RECOMメールリグリスト 99年秋に「ア・ブッした」に「リグ」リスト。会員・関係者間の意見交換、事務局からのお知らせ、ラテンアメリカニュース、

イベント情報(そんりさ情報欄に掲載されなかったものなど)、ラテンアメリカ関連TV番組情報などなど。申し込みは recom@ica.apc.org まで(会員・関係者のいずれも参加可能です。現在、100名ぐらいの会員・関係者(退会者含む)が参加しています。

先日身内の家庭に家族が一人増えました。正にこの世界に出てきたばかりです。

その子に触れ、抱いてみたくなった私は周りから、「ちょっとおー、落とさないでよー! 気をつけてよー! 大丈夫?!」という声を背中に浴びつつゆっくりと抱きかかえてみました。小さくて、柔らかくて軽いんだけど確かな重さがあります。「手を滑らせて落としてしまったら一瞬で壊れてしまい、この命はあっという間に消えてしまうだろう。」という思いがぱっと頭に浮かび、緊張してきました。同時に、その温かいぬくもりと今私が抱いているこの腕の中にある確かな物に対し、めいっばいの命を感じました。体全体からその命の重みをずっしりと感じ取り、またその命に直に触れているという感覚です。

久しぶりに感激しました。思いがけず人の命の尊さを、感じることで再認識しました。

「そりゃあ、あなた、命は尊いものでしょう。そんな事当たり前でしょう。」と別の自分の声がしますが、そんな「当たり前」の事を頭で思っても、感情で忘れていた気がします。(ヨシエ)

今回の『そんりさ』の印刷・発送作業は**11月30日(土)**の予定です。参加いただける方は連絡ください。

大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間にできてしまいます。

レコム・メーリングリスト参加のご案内: 会員、購読者は無料で参加できます。登録したい方は
E-mail: recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがとんとんリニューアル!

<http://www.jca.apc.org/recom/>

『そんりさ』バックナンバーの紹介

Vol.75 ウルグアイ & コロンビア
Vol.74 ベネズエラ & ブラジル
Vol.73 グアテマラ コパカパ & テイト
Vol.72 メキシコFOX政権 & キューバ

Vol.71 環境問題報告 (グアテ & ニカ)
Vol.70 来日報告 (ペルー & グアテマラ)
Vol.69 コスタリカ & エクアドル
Vol.68 ペルー & グアテマラ & エルサル

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。

入会したら、自己紹介メールを添えてrecom@jca.apc.org までご一報を。登録します。

レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座: 00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8,000円 (学生5,000円) …会の運営、総会での投票、『そんりさ』資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10,000円 (一口) …資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4,000円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-13-5-205

事務所は JR 水道橋駅西口下車 5分

TEL & FAX 03-3222-0433

☺ お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

家の近所にコーヒード
の専門店がオープンしま
した。メキシコ、グアテ
マラ、コスタリカ、コロ
ンビア、ブラジル、ラ
テンアメリカの国々の豆
がたくさん並べられてい
ます。それだけの国のこ
とをあれこれと考えなが
ら各地のコーヒーを味わ
ってみるのなかなか楽
しいものです。

(S)

編集後記